

# 検証 中ソ論争

## 首脳会談を前に

六〇年代から七〇年代にかけて、世界を驚かせた中ソ論争は、なぜ起きたのか。また、その持つ意味と、もたらした影響は。さらに今後に残す教訓は——。国際政治や経済の専門家にインタビューした内容を紹介する。

(聞き手 近藤 電夫記者)

——今日から振り返って中ソ論争は歴史的に有無意味を持つものであったのだろうか。

中嶋 現代世界の新しい状況に社会主義がどう対応すべきかをめぐり、根本的な対立があった。そこであのような深刻なイデオロギー論争になった。國家利害の対立、社会主義陣営内の覇権争いの側面もあったが、マルクス主義の異端と正統をめぐる非妥協的な論争、対立としての現代史的意義を昇格とすわけにはいかない。

具体的には一九五六年のソ連共産党大会で出されたスターリン批判をどう受けとめるか、という形で始まり、当初は戦争と平和、また平和共存、社会主義への移行の多様な道とをめぐる論争であった。当時、ソ連は工業化が進み、知識人やテクノクラートが目覚めて従来の専制体制を打破せざるを得なかった。

# 双方に大きな犠牲

# 社会の充実 競う時代へ

——論争によって社会主義陣営に批判した「修正主義」に滑って、経済改革や外交を行っていき、時間的ムダな論争による革命の代価の大きさがわかる。

争だつたようにも見える。あるいは歴史が進む過程で避けられないものだったのかも知れないが。

中嶋 毛沢東の強烈的な自己主張が中ソ対立をあのようにならせた。最大の要因であるが、結果的には文化大革命と同様に毛だつた。それにしても、社会主義陣営がどれだけ豊かになったか、民衆がどれだけ自由に平等に解放されたかを西側諸國の現状と比べると、その立ち遅れがよくわかる。おかげで現代にける革命の代価の大きさがわかる。

つた。もうアジアには社会主義革命は起きないだろう。革命で大國となった中ソ兩國はその結果生まれた矛盾の重きに悩んでいる。二十世紀に向けて、いかにその矛盾を解決するか、そこに改革路線が生まれ、だが、多くの困難に直面し、内輪けんかなどしている余裕はない。社会主義の活性化と西側含め依存関係

見ている。内部の急激な西側傾斜とくに自由化への流れや民衆反乱をくいとめるために、社会主義陣営の連帯が必要となる。内部に問題をかかえているがゆえの「同盟」であり、今日の非軍事化の世界的潮流の中で、それが軍事的脅威になることはないだろう。つまり、西側諸國との交流を深めながら社会主義陣営の再編が進められるという過程が続くとみない。

中嶋 社会主義に希望がなくなりつつある時代の中ソ和解とは、皮肉なものだ。十九世紀の社会主義理論は二十世紀の國家レベルの実験で成功せず、二十世紀には社会主義から離脱の方向が「革新」ないし「進歩」とみられるようになる。時計の針の逆回転は避けられそうにない。

資本主義陣営は社会主義の理念を先取りして國民の間を格差を小さくした。二十世紀は軍事力やイデオロギーではなく、経済や社会の充実で競い合う世界になる。中ソ対立は大きな犠牲を払ったし、不毛な対立ではあったが、人類の歴史から見れば、我々に大きな教訓を与えてくれたことになる。

## 中嶋 嶺雄氏に聞く

### 東京外国語大教授(国際関係論)



延命のためにも相互協力せざるをえなくなり、今回の中ソ首脳会談になった。ソ連は社会主義の工業國、中国は修正主義としての相互補完性があり、関係は緊密化するだろう。

中ソ関係改善に続き、モンゴル、朝鮮民主主義人民共和國(北朝鮮)、ベトナムなどの國々も連帯関係を再構築し、ゆるやかな同盟が結成されると

新な関係強化はその防止策といことだろうか。

中嶋 経済改革は資本主義のメカニズムを徹底的に導入しない限りうまく行かないだろう。しかし現体制を根本的に覆す恐れのある施策はすぐにはとれまい。改革で徐々に解決せざるを得ない。西側も社会主義を支援し、経済を活性化させ、相互に依存していく時代になりつつある

——先進技術の導入、投資促進のために西側との協力関係が重要なのだが、緊密化により、国内で民主化、より多くの自由を求める声が強まると、社会主義政権の足もとをすくわれる可能性が生じる。社会主義陣営の